慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	再論 Guild Socialism (二)
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.3 (1920. 3) ,p.394(92)- 415(113)
JaLC DOI	10.14991/001.19200301-0092
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19200301-0092

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

再論 Guild Socialism (二)

小泉信三

(十一)

ギルドソシャリズムは國家の存續を認め、之をして消費者の利害保障の任に當らしめやうとする點に於てサンヂカリズムと異なる事は既に前に述べた。然らば國家は如何なる手段に依て生産者の强搾を防がうとするか。彼等の理想に描くギルドは産業の經營權を獨占して其任意の方法に依て造れる生産物を賣却する。而して各ギルドの收入はこの賣却代金から得られるものとすれば、ギルドは其獨占的地位を奇貨とし、公衆の利害を無視して出來る丈け生産物の價格を高くして收入の增加を計らうとする危險がある。この危險は如何にして之を防ぐか。ギルドメンの考へて居るところに依れば其手段の第一は課稅である。それはどうするかと云ふと、國家は先づ今日と同じ樣に經費の豫算を立てる。さうして經費總額がきまつたら之を各自の負擔能力に應じて各ギルドに割當てる。この租稅の配賦はギルドコングレスが行ふか、或はギルドコングレスと國家とを平等に代表する委員會が之に當るか何れかにする筈である。ところが各ギルドの租稅負擔能力はその收益力の大小に由り、收益力の大小はその生産物の價格と直接の關係がある。そこで一ギルドがその生産物の價格を高くすれば從つてその負擔する租稅額も高くならなければならぬ。それ故價格の決定を各ギルドの自由に放任しても消費者は强搾を蒙る恐れはない。價格の引上げに依て消費者が蒙る餘分の負擔は國家の收入となつて再び消費者に復歸する筈なのである。

斯くの如くにすればギルドの爲に公衆が搾取される危險はない。併しギルドメンは決して如何なる場合にも價格は之を各ギルドの自由決定に放任して差支ないと云ふのではない。彼等の見るところに從へば斯く自然に成立した價格は決して最善の價格ではない。何故と云へば將來の社會に於ては或種の物、例へば交通機關、パン牛乳類の如きものを殊更に低廉にすることが望ましい。概括的に云へば各人の凡て平等に必要とするものは無料にし、現在よりも廣く消費せられん

事を希望すべき何等かの理由のあるものは之を低廉にする必要があるからである。そこでギルドメンは租税配賦の場合と同樣に消費者の代表者たる國家と生産者の代表者たるギルドコングレスとを平等に代表する Joint Congress をして價格を決定せしむる事を主張するのである。

ところで私の考へるには國家がギルドコングレスと共に生産物の價格を決定すれば、それは勢ひ直接又は間接に各ギルドの生産すべき生産物の分量に干渉しなければならぬ。需要に比して遙かに供給の不足して居る貨物の價格を低廉にすることも、供給の需要に超過して居る貨物に高價格を定めることも共に不可能なる事は明白である。然るに生産物の分量に干渉する事になれば事實上各ギルドに於ける勞働時間にも干渉することになりはせぬか。Cole の云ふ處に從へば價格は生産者の問題たると共に消費者の問題であつて、國家は此範圍で支配權に與かる事に依て、決して産業の自治に干渉する事にはならぬ。生産者は依然生産行程の支配權を握つて居ると言ふ事だが、價値の決定――生産物量の決定――勞働時間の干渉、と云ふ徑路を經て消費者が生産行程(勞働條件)に干渉する餘地は未だ殘されて居るものと見なければならぬからである。

（十二）

ギルドソシャリズムの舊社會主義に對する特色はその自由を尊重する點に存する事は既に再三述べた通りである。ところで彼等が理想とするナショナルギルドは一産業に從事する全勞働者(最廣義に於ける)を網羅するものであるから、若しナショナルギルドの權力が中央機關に集中せられ、凡べての問題がこの中央機關に依て決定せられる事になればギルドソシャリズムは一の官僚政治を排斥して他の官僚政治を迎へたと云ふ結果に陷らなければならぬ。

この批評は二三のコレクチヴストの現にギルドソシャリズムに向て加へて居るところである。之に對して Cole はその産業自治論の中で試みに機械製作業ギルドの規約の案を立て、ギルドの内部に於て各個人、各工場、各地方、各職業の自由を保障する爲め如何なる制度を設く可きやを説明して之に答へて居る。その規約の草案は煩雜に亙るので今それを茲に紹介する譯には行かぬが、其原則を云へば、Cole はギルドの中央委員會及び地方の委員會の職分を大體に於て生産物の賣買

に關する範圍に限り、純然たる生産行程上の問題は之を各工場の自治に一任する。この點に於てギルドの組織はトラストよりも寧ろカルテルに近いものだと言ふ。而して各工場の經營は從業員に選擧せられた委員會が當ると共に直接勞働者に指揮命令を下す地位にある職工長支配人は夫れ〳〵その命令を受ける地位にあるものが之を選擧する。同時に全産業の利害の爲め、地方委員會及び中央委員會は何れもその半數は地方若くは工場の代表者、他の半數は各クラフトの代表者を以て組織せられ、更に中央委員會の上に全國各地（ヂストリクト）の各職業を代表する全國代議員大會を置いて、地方の利害と職業の利害の調和を計り、斯くしてその自由の要求を滿足せしめやうとするのである。

然るに之に對してコンクチヂストは更に別の反對論を提出する。それは産業上の自由と能率（エフィンエンシイ）とは兩立しないと云ふのである。彼等の見る所に從へば産業上の能率を高める爲めには何うしても、命令服從の關係が必要である。命令者の地位が命令をうけるものの意志に依て動かされ得る所では經營の規律を保つことが出來ぬ。規律を保つ事が出來なければ能率も亦減退せざるを得ぬ。彼等は既に之を一理由として所謂生産組合の失敗に終らざる能はざる所以を説明してゐるものであるが、同じ理由に依てギルドメンの主張する産業自治は彼等にとつて望ましいものではないのである。而して之に對するギルドメンの答はギルドソシヤリストと英國從來の社會主義者との立場の根本的に相容れぬ事を示して居るのである。即ちギルドメンの觀る所に從へばコレクチヂストの根本の誤謬はその勞働者の人間たる事を忘れて居る點に存する。産業上の自治、産業上の自由は、決してエフイシエンシイと相容れぬものではなく、「却て眞のエフイシエンシイに導く鍵こそは自治なのである。自治を基礎とせざる制度は如何なる制度も當に壓制的なるのみならず、同時に又インエフイシエントである。宛かも賃銀奴隷の勞働でも眞の奴隷の勞働よりは能率の高いと同じ樣に自由なる人の勞働は眞の奴隷、賃銀奴隷何れの勞働よりも優ること萬々なのである」（二二七頁）自治を忘れて獨り能率のみを求むるものは勞働者も偶々人間たりと云ふ簡單なる理由によつて必らず失敗すべき運命を擔つて居る（二九七頁）といふのである。而してかゝる主張の根柢に存するものはギルドメンの人間本性（ヒユーマンネーチユア）に對する理想家的信頼で

あつて、Coleは此の點に於て空想に豐かな人格の高い初期の社會主義者と多く共通の要素を有して居る。と評した Marshall の言は私の首肯するところである。(Industry and Trade. p. 844 note)

之を要するにフエビヤン一派とギルドソシヤリストの根本的の相違は彼は人間を信じない實際家であるのに對して此は人を信ずる理想家だと云ふ點に歸着する。實際家の目から見れば理想家の言說は迂濶で且つ俗に云ふ目出度いものであるだらうが、理想家の目から見れば實際家の見解は低調で俗惡であるに違ゐない。Coleを始め Hobson, Penty, Russell 等の書を讀むものは通篇到處に理想家の俗物に對する反感と輕侮の念が露骨に現れて居るのを看過しないであらう。彼等はフエビヤン一派の社會主義者が日常生活上の必要のみに重を措いて、人間の憧憬感激熱情理想等を解する事が出來ないのを陋として唾棄するのである。而して英吉利從來の社會主義が他に如何なる功績あるにもせよ兎に角この批評を辭する事を得ないのは恐らく識者の一樣に認めてゐる所だと思ふ。ギルドソシヤリズムは集產主義とサンヂカリズムとの折衷から生れたものだとは云ふけれど此點に於ては集產主義よりは確かにサンヂカリズムに傾いて居るのである。即ち Cole が「吾等にして若しサンヂカリズムとコレクチヤズムと二者其一を擇ばなければならぬ時には、それに伴ふ危險あるにも拘らず、サンヂカリズムを擇ぶ事が凡べて善き人の義務でもあり、その本心でもある。何故と言へばサンヂカリズムは、生產が一般公衆の利益の爲めに行はれる事の保障を與へる事は出來ぬにしても、兎に角その目を高處に着けて居る。サンヂカリズムは高尙な心 noble mind の過失であるがコレクチヤズムはたかゞ〳〵良心ある實業家の卑陋なる夢想に過ぎぬ」。(sordid dream of a business man with conscience) との激語を發する所以である。

（十三）

以上私は主として Cole の立場に據つてギルドソシヤリズムを紹介して來たが、所謂ナショナルギルドメンは必しも一切の點に於て Cole の意見を奉じてゐるのではない。ギルドに依る產業自治を實現しようとする點及び國家存續の必要を認める點に於ては彼等は皆なその見解を一にして居るが、國家の存續を必要とする理由及び國家とギルドとの關係に就いては、Cole と共に最も聞えてゐる Hobson

はColeとは少し違つた見解を抱いてゐるのである。既に述べた通りColeは消費者の利害の代表者として國家又は地方自治體が產業に干涉するの必要を認めてゐるのと違つて、Hobsonは原則として產業經營の事は一切之をギルドに委し、國家は別に專らその國家特有の本務(法律、衛生、軍備、警察、對外國關係、敎育及び中央並に地方政治)に力を集注すべき事を主張するのである。勿論Hobsonと雖ども國家がギルドに干涉する必要の起る場合を認めてはゐる。即ちHobsonは其の"National Guilds"中で政治的職分と經濟的職分とを區別して前者を國家、後者をギルドに擔當せしむ可き事を主張した後で、更に續けて「政治的職分と經濟的職分との分割は國家に均衡と安定とを與へるが、併し猶ほ國家の政策と運命とは究極その經濟的行程の健全であり、權衡を得てゐる事に依て定まるのであるからギルドの「メンバア」の利害とは違つた別の市民の利害 interest of citizenship の利害を擁護する爲め、國家は其代表者をギルドの政治機關に參加せしめなければならぬ」(二五八―九頁)と云ふのである。而してこの所謂市民の利害がColeの所謂消費者の利害と同じものでない事はHobsonの特に言明する所である。曰く「市民權 citizen right と消費者の利害とは別種のものである。この二者を呼ぶに同一名稱を以てすることは目的の混同を來たし、國家とギルドとの間に無用の軋轢を生ぜしむる所以である」と。(Bechhofer and Reckitt, Meaning of National Guilds p. 358) Hobsenの見るところを以てすれば消費者の利害は別に國家の干涉を俟つ迄もなく、之をギルドの自治に委しても能く擁護せられると云ふのである。

この二家の見解の相違は兩者が共にギルドソシャリズムに到達した思想上の出發點が違つてゐた事に依て說明せらるべきものであらう。Hobsonはその始め"New Age"に寄稿した論文では賃銀制度に代る可き唯一のものとしてナショナルギルドを主張しようとした。彼の見る所に依れば、ナショナルギルドは一方に於ては勞働者の精神的繫縛を斷つと同時に他方では產業を產業當事者の手に委する事に依て、獨り勞働者許りでなく、同時に國家をも產業から釋放して、その本來の精神的職分に主力を盡さしめ得る二重の利益があるのであつた。一方に於てColeは其"World of Labour"では資本主義を倒して生產者の組織を以て之に代らせようとするサンヂカリストの要求に何れ程の眞理が含まれてゐるかを主とし

て究めようとしたのである。而して彼は人間の、生産者としての物の觀方と、消費者としての物の觀方とが非常に違ふと云ふ事實に着目して、消費者の利害を看過し者た點にサンヂカリズムの弱點を見出した。消費者の閑却は産業上の壓制と混亂とを意味する。Cole に取ては集産主義の價値はその消費者の存在を思ひ起こさせる一點に懸るのである。Hobson は國家の職分から産業を抽去らうとしたが、Cole は消費者の見地を以て之を制する事に依てサンヂカリズムを合理化しようと試みた。前者にとつてはナショナルギルドは國家が經濟問題を其本務でない事を發見し、之を擧げて勞働者の手中に委するの決心を示す事に依て生れたるものであるが、後者に取てはナショナルギルドはサンヂカリストが勞働組合は社會内に於ける一切の利害を代表するものでない事を發見する事に依て發達すべきものなのである。Hobson の國家は、勞働者を賃銀制度より救ひ、併せて國家を經濟問題より救ふ爲にギルドの援けを求めたが、Cole の國家は資本主義を倒し得て而かも困惑せるサンヂカリストを援助せんが爲めに出現したのである。(Bechhofer and Reckilt pp. 355—6)

（十四）

ギルドソシャリストの言説中にはそのギルドと云ふ名稱を擇んだ彼等の趣味が既に示してゐる通り、勞働者が、賃傭奴隷ではなくて、自ら己れの製作に喜悦を感ずる獨立の工人であつた中世の昔を回顧する傾向がたしかに窺はれるが、この復古的色彩の最も顯著なるものは既に千九百六年 Restoration of Guild System を著はした Penty である。Penty の近著はその Old Worlds for New と云ふ標題に依て示されてゐる通り社會改造の業は中世のギルド手工業制度の範に倣つて行はるへきものなる事、即ち「前進する爲めには回顧する事の必要なる」事を説いたのである。Penty の見るところに從へば根本の弊害は Industrialism（大工業主義）に存するので、資本家と賃銀勞働者とはこのインダストリヤリズムの必然的徴候に外ならぬ。從つて大工業主義が存續する限り、ギルド制度の復舊も、勞働者の手に依てする資本主義の顚覆も共に豫期する事が出來ぬと云ふのである。この見地よりして Penty がフエビヤン集産主義を非としたのは論を俟たぬけれども、同時にナショナルギルドメンの主張も亦その大經營と機械の使用とを是認する點に於て Penty の

批評を免れる事が出來ないのである。現在の工業組織を維持する以上は資本主義は避くべからざるものである。「現在の工業活動の上にギルド組織を載せる事は不可能である。利潤慾、分業、及機械の誤用は甚しい混亂と夥しい寄生的職業の發生とを促がしたので、工業は資本的基礎の上にでなければ組織する事が出來ないのである。工業が今日の如くなる限りは資本家は必ず百事の主宰者たる事を失はぬであらう。何となれば今日の工業は資本家の活動を離れては何等の有機的組織を有つて居らぬからである。……斯かる事情の下に於てはギルド復興の手段を講ずるに先立つて先づ工業を健全なる正當の狀態に復せしめる事が必要であるであらう」。(Old worlds for New, p. 103)

斯かる理由でPentyは始めナショナルギルドメンの運動と歩調を共にする事が出來なかつたのであるが、最近に至つて彼はナショナルギルドを以て彼れが主張する地方的（ローカル）ギルドの先驅、之に到達する階梯と認め、其の序文の中の記して、「……私の主張する地方的ギルドの制度が直ちに實行す可からざるものと認められた。この決定に對しては私は全然同意するのである。今日私はかゝる制度と實際政治とを距つる溝渠の餘りに深くして越ゆ可からざる事、而してナショナルギルドの政策とその賃銀制廢止の要求とが今日にとつての唯一の實際政策なる事をたゞ餘りに明かに認め得るものである。」と謂ふのである。たゞナショナルギルドは遂にPentyにとつては地方的ギルドに到達する階梯に過ぎない。故に彼は、ナショナルギルドの終局のものにあらざる事、一度勞働者にして產業の支配權を掌握する時はインダストリアリズムの根柢に横はる矛盾は解決を要求し、この要求は吾人を促がして地方的ギルドへの途に向はしめるのであらうと云ふのである。(Old Worlds for New p.9)而してナショナルギルドメンも深くこの點を爭はぬ事はBechhofer 及 Reckitt が「…假に吾々がナショナルギルドを以て終極のものとは主張しないとしても、吾々はその最初のものなる事を主張する。地方ギルドの宣傳（プロパガンダ）は、吾等の見る所を以てすれば、ナショナルギルドの宣傳の終つた時から始まるべきものだ」と云ふに徵しても察する事が出來るのである。(p. 405.)

（十五）

ギルドソシャリズムの理論的主張は以上を以てその大略を盡した。次の問題

は英吉利現在の勞働組合にはどれ程までこの理論的主張を實現すべき準備が出來てゐるかといふ事である。

英吉利勞働組合運動の現狀を觀察するものの第一に氣の付く事を英吉利勞働組合に全體としての整理統一が欠けてゐて、無數の小組合が分立併存してゐる事である。即ち千九百十六年末の統計に依れば勞働組合員の數が四、三九九、六九六人。組合の數が一千百十五である。之を千九百年の計算に比較すると組合員の數一、九七一、九二三から二、三倍弱の增加をなし、反之組合の數は千三百二から二百の減少を示してゐるのであるから(G. D. H. Cole: Introduction to Trade Unionism, P. 109)小組合分立の狀態が幾らか改善せられる方面に向つてゐると言へない事はないが、之れを今日獨逸の勞働組合員全體が五十の大組合に統一されてゐるのと比較すれば素より同日の談ではないのである。そこで識者は殆ど例外なく勞働組合合併 amalgamation の必要を認めてゐるのである。然るに現在の勞働組合を合併することになれば必ず如何なる原則に基いて之を行ふべきかの問題に逢着する。術語に所謂 craft unionism か industrial unionism か、その何れに從つて合併を行ふべきかの問題である。

Craft unionism と industrial unionism との別は既に度々論ぜられて居るが、今その極めて大略を云へば craft union（職業別勞働組合）とは生產上同じ過程を掌るもの、同じ仕事をするものの組合であつて、鑄型工組合石工組合又は機械工が組織する有名な機械工合同組合 Amalgamated Society of Engineers の如きは之れである。尤も同じ仕事をすると言つても同じ仕事といふ意味には廣狹二樣の解釋があつて、上記の鑄型工組合又は石工組合のやうに、嚴格に同じ仕事に從事するもののみを以て組織する組合と、同じく上記機械工合同組合や又は汽罐製作工組合のやうに全然同一の仕事ではなくて、同種又は相近接せる作業に從事するものを一の組合に糾合するのとの別がある。(註) 而して craft unionism を廣く解釋するものと、狹く解釋するものとの間に衝突の起り得る事は鍛工組合又は鑄型工組合と機械工合同組合との間に屢々組合員の爭奪が行はれてゐる事實に徵して明かである。併し職業別勞働組合の組織の原則丈けは以上の説明に依て了解するに難くないだらう。

註　Amalgamated Society of Engineers に加入せる職業（クラフト）の重なるもの左の如し

fitters, turners, machinists, millwrights, smiths, electricians, planers, borers, slotters patternmaters etc.

Industrial Unionism（産業別勞働組合主義）は之に反して、同一産業 industry に屬する一切の勞働者を一の勞働組合に結合する事を主張する。即ち共同（同一）の生産物を作り、又は共同の勤務を提供する爲めに協力する凡べてのものが、個々の擔當する任務又は熟練の程度如何に論なく、一の組合を組織する事を主張するのである。鐵道從業員が一の鐵道從業員組合を組織し、炭坑業に從事するものが一の炭坑業勞働者組合を組織する事を主張するのである。此の場合にも細かく觀察すれば疑問は起る。それは抑も一の産業（インダストリイ）とは何か。一の産業と他の産業との境界線は如何にして引く可きかと云ふ事である。實例を以て云へば英國鐵道從業員全國組合は鐵道業に關係せる凡べての勞働者を收容せん事を期するものであるが、一方に鐵道會社附屬工場に傭はれてゐる職工は樣々の勞働組合に加入してゐる。Steal Smellers はこの組合の一であるが此の組合は熟練不熟練を問はず製鐵及製鋼業に從事する一切の勞働者を收容せん事を期する一の産業別勞働組合である。そこで鐵道會社に屬して鐵道の爲めに鐵板鋼板軌道等を製作する附屬工場は果して鐵道業に屬すべきものかそれとも製鐵業に屬すべきものかといふ問題が起るのである。此種の難問は他に實例を求むれば猶ほ甚だ多からうと思はれる。併し之れは産業の限界に關する困難であつて産業別勞働組合と職業別勞働組合との原則上の區別は斯る困難に關係なく明白なのである。

（十六）

この二つの主義（原則）は樣々の點に於て相容れない。それでは産業別勞働組合と職業別勞働組合の長短如何と云ふに、勞働組合の任務としてその共濟組合 friendly society としての職分に重きを措くときは、仕事の種類熟練の程度を同ふし、且つ比較的高率の賃銀を得てゐる勞働者のみが相集つて組織する職業別組合を可とすべき充分の論據が立つのであるが、反之勞働組合を勞働者がその團結の力を以て雇主に壓迫を加へそれに依て地位の改善を計らうとする鬪爭機關と見れば、一産業の從業者全體を團結せしむる産業別勞働組合を可とすべき多くの理由が見出されるのである。是等の點に就いて職業別産業別兩主義の何れかを取るものには猶ほ多くの説があるであらう。併し、是等の論は何れも勞働組合を從來の如

く賃銀勞働者の境遇改善の手段と見て起るところの問題であつてギルドソシャリストの樣に賃銀制度その者を廢止し、勞働組合をして産業支配の任に當らしめやうと主張するものに取ては全く議論の餘地はない。是等の論者に取ては勞働組合は勿論産業別勞働組合でなくてはならぬのである。職業別勞働組合は如何に强大緊密な組織を有するものと雖産業支配の衝に當る事は理論上不可能なのである。前にも引用した機械職工合同組合は七十年の歷史を有する甚だ有力な職業別勞働組合であるが、此大組合の組合員は或は造船業或は鐵道業或は建築業に傭はれてゐる。それでは此組合の屬員が比較的集中してゐる造船及機械製作業は何うかと云ふに、此等の産業に從事する勞働者の半數即ち鑄鐵工、大工、指物工、塗色工の如き熟練職工及び無熟練なる普通勞働者の大多數は此組合に加入する事が出來ないのである。（事實上加入してゐない許りでなく、加入を許されぬ uneligible なのである）斯の如き實狀の下に於ては機械工合同組合が如何にその組合員數を增し或はその組織を緊密にした所で産業經營の任に當る事の不可能なるは論ずる迄もなく明白である。各種の産業に散在してゐる鑄型工、塗色工、大工、指物工などが全國的に互る勞働組合を組織した所で、その産業經營の目的に適はぬ事は皆一樣である。要するに此點に關しては問題はない。職業別勞働組合の主義を奉ずるものは必ず現在賃銀制度の承認者であり、勞働組合を通じて産業支配權を勞働者の手に掌握せん事を主張するものは必ず先づ産業別勞働組合を要求しなくてはならないのである。

（十七）

そこでギルドソシャリズムの實行の準備がどれ程迄整へられてあるかといふ問題は、英吉利に於て、勞働組合組織の原則として industrial unionism がどれ程迄、承認せられて居るか、及び之れを通じて勞働者の手に産業支配權を掌握しようとする要求が何の程度迄表面に現れてゐるかと云ふ問題の意味に解釋して差支なからうと思ふのである。この見地からして、英吉利勞働組合には果してギルドソシャリストをして意を强うせしむる樣な事實があるかといふにそれは決して皆無ではない。而してその最も顯著なるものとして指摘すべきは鐵道從業員全國組合 National Union of Railwaymen の急速なる發達とその發達の傾向とである。

元來鐵道從業者間に於ける組合運動は他より遲れて發達し、久しく不振の狀態にあつたのであるが、それが千九百六、七兩年の所謂 "all grades movement" から俄かに活氣を帶びて來た。この運動は時の商務院總裁 David Lloyd George が調停を試み、鐵道從業員の爲めに一種の和解制度 Conciliation Scheme を設ける事に決して落着したが併し之は鐵道從業員を滿足させたのではなくて彼等自らその團結の力の不充分なる事を知つて暫く隱忍したのであつた。果して此和解制度實施の成績は甚だ不良であつた。而して此事實は鐵道從業員間に團結の精神を旺にする結果となり、千九百十一年に至て遂に鐵道全國同盟罷工を齎らし、之が機會となつて千九百十三年に至り、同盟罷工に參加した四ッの組合の三つが合併して National Union of Railwaymen を組織したのである。その三つと云ふのは(イ)鐵道雇員同盟會 Amalgamated Society of Railway Servants (ロ)鐵道從業一般勞働者組合 General Railway Workers Union (ハ)信號手及びポイントメン組合 United Signalmen & Pointsmen で、合併を肯じなかつた一つは機關手火夫聯合組合 Associated Society of Locomotive Engineers & Firemen であつた。この外猶ほ有力な組合には驛長、役員、書記等を以て組織する鐵道書記聯合會 Railway Clerks' Association がある。即ち現在鐵道業には三つの重なる勞働組合(註)が存する譯であるが、我々の興味の中心にるものはいふ迄でもなく National Union of Railwaymen である。

註　鐵道業に於ける重なる勞働組合の數字的勢力左の如し

National Union of Railwaymen	400,000
Associated Society of Locomotive Engineers & Firemen	38,000
Railway Clerks' Association	60,000

(Cole, Introdution to Trade Unionism, p. 115.)（未完）